

言語発達研究への機能主義的アプローチ

和 光 大 学	伊 藤 武 彦
横浜国立大学	林 部 英 雄
中央大学	石 黒 広 昭
はつかりの家	町 田 重 光

は じ め に

言語はすべて、伝達の機能と記号的体系性を備えている。人間は、意図や情報を自分と他人との間で伝達しあうために言語を使用する。一方、言語は記述され意識化されているかどうかは別として、すべて一定の構造的体系を持っている。このような言語構造を記述したものを文法と呼んでいる。伝達という言語の機能と、文法的な言語構造とは対応関係がみられる。命令するときには、動詞を命令形にするなどがこの例である。しかし言語の機能と構造は1対1対応しているわけではない。同じ内容の情報を伝達するために、さまざまな言語表現が可能であるし、「この部屋は寒いね」という発話を聞いても、それが場面によって、間接的命令、冗談、非難、外出への要求等々、聞き手の受け取り方は様々であろう。このような言語使用や話し手・聞き手の置かれている場面や文脈と言語表現との両者の関係を研究する分野は、語用論 (pragmatics) と呼ばれている。文の構造を文のおかれた環境との関連で問題にするというように、言語の形式的側面 (文法) を研究するにあたって、言語使用の語用論的側面をふまえてそれを問題にする研究態度を機能主義的と呼び、このような立場で研究する方法を機能的分析と呼ぶことにしよう。両者を区別するならば、文とその環境との相互関係に重点を置くのが語用論的研究であり、文の分析自体を中心にするのが機能主義的研究であると言えよう。本論文では、言語獲得過程の研究に機能的分析の方法をとり入れた諸研究をいくつかの分野を中心に概観することにより、機能主義的アプローチが心理言語学や言語発達研究に有効性を持つことを明らかにしたい。

言語学において機能主義的研究が実証的に行なわれたのは1929年以降であり、ブラーク学派がその中心であった。しかし、心理言語学でこのような方法が採用され始めたのは最近のことである。

心理言語学の歴史

心理言語学 (psycholinguistics) という学問分野ができたのは1950年代のことである。その当時、心理学の分野では、行動主義の考え方が台頭し、また言語学ではこの行

動主義の影響を強く受けた構造主義言語学がもてはやされていた。このような風潮の中で、生まれたばかりの心理言語学がすぐに隆盛を見たわけではない。むしろ心理言語学の本格的な発展は、Chomsky の生成変形文法理論が提出され、心理学においては Norman らの認知心理学の考え方が盛んになる 1960 年代まで待たなければならなかった。

心理言語学が 1 つの分野として承認されるようになって最初にこの分野の研究者達が手がけたことは、生成変形文法理論で言うところの文法の心理的実在性を確かめるということであった。これは、人間の文理解の過程及び発話の過程には少なくとも、文法理論における変形規則と 1 対 1 に対応する過程が含まれているという仮説に代表される考え方である。この仮説は派生による複雑度理論と呼ばれる形に表現されている (Miller, 1962; Savin & Perchonock, 1965)。すなわち、深層構造が表層構造になるまでに適用された変形規則の数が多ければ多い程、文の複雑度が増加し、正確な記憶が困難になるというものである。そして、この理論に合致する実験結果もいくつか挙げられた。しかし、その後、生成変形文法理論自体の変化によって、以前には存在すると考えられていた変形規則が存在しないことが明らかになった。

(1) Someone ate the apple.

(2) The apple was eaten by someone.

(3) The apple was eaten.

(3) の文は (2) の文より少なくとも 1 つ余計に変形規則の適用 (by-句消去変形) を受けて表層構造になったと考えられるが、実際には、理解も記憶も (3) の文の方が (2) の文より容易であるというような明らかな反例が挙げられたことなどにより、言語運用のモデルとして適当なものではないとされるようになった。

上記の理論に代わって登場してきたのが、知覚のストラテジーの理論である (Bever, 1970)。この理論によれば、人間が文を理解したり、発話したりする過程には文法とは独立のストラテジーという名前で呼ばれる規則が働いていることになる。例えば、日本語を話す人は皆、NNV ストラテジーという規則を用いるが、これは、名詞—名詞—動詞という連鎖をその順に、行為者—行為の対象—行為と理解するという規則である。本来多義的であると考えられる (4) の文、

(4) ナオコはセイコは好きだ。

が、一般的には、ナオコがセイコを好いているという意味にしか理解されないのは、このストラテジーが存在するからだと説明される。また、おおむね 3～4 歳頃の幼児が、

(5) の文、

(5) ナオコがセイコに叩かれた。

を誤って、ナオコがセイコを叩いたという意味に理解するのは、NNV ストラテジーのみが習得されていて、受動文を理解するストラテジーの習得が充分ではないからだと考えることができよう。

以上の理論は、その守備範囲が文を単位とするものであり、また、理論的には、理解と発話の両者について考慮されなければならないというもの、実験的研究はその対象がほとんど理解の面にだけ限定されている。この理由の一つとして、理解の面は、場面、文脈等の情報を捨象しても実験が可能だが、自然な発話は、常に場面や文脈に即したものであり、それらを捨象しては意味のないものになってしまうからということが考えられる。このような事情もあって、文を場面、文脈から切り離して考える研究は行き詰まりを見せていた。

この傾向を打開するように 1970 年代の後半から盛んになってきたのが、本論文で取り上げる機能的分析理論であろう。この理論は、それ以前の理論の特徴と対照すると明らかになると考えられるが、1 つには、考察の対象を文に限定せず、前後の文脈、あるいはその文が語られる場面の情報までを含めての研究が行なわれるということが挙げられる。端的に言えば分析の単位が談話となったのである。また、70 年代前半までの研究は、一般に文の構造をいかにして理解に関連させるかという観点からのものであったが、機能分析は、その名称にもある通り、言語の機能に目を向けようとする。さらにはこれらの考え方の結果として、発話の実験的研究が可能になったという特徴が挙げられるであろう。現在のところ、本論文にも述べたが、この理論で用いられる概念や用語も統一されていないといった状況であるが、これまでの経過から見て、心理言語学の分野では、機能分析の方向が今後さらに深まるものと予想される。

言語発達研究における機能的分析

機能的分析あるいは機能主義的アプローチを言語発達研究に適用していく上で重要な参考となるのは、Bates と MacWhinney (1979) の提案した言語装置 (device) と動機 (motive) との相互関係のモデルである。言語装置とは発話意図や意味を運ぶ表層的な言語伝達手段の要素であり、それは、(a) 語彙項目 (内容語)、(b) 語順、(c) (a) に付く形態素的標識 (動詞変化、前置詞、助詞等)、(d) イントネーション等である。他方、動機とは、表現され、伝達されるべきさまざまな要素であり、意味論的なものと語用論的なものとに大別される。意味論的なものとしては、(a) 特定のモノや行為の言及、(b) モノや行為の性質、様態の言及、(c) 格関係 (いつ、どこで、誰が、誰に、何を等々) が挙げられ、語用論的動機として、(d) 発話行為あるいは話者の伝達意図、(e) 伝達者間の地位関係、(f) 話者の情報に対する態度、(g) 新-旧情報、(h) 主題化または情報の焦点化、(i) 前提 (発話が理解されるために必要な背景的知識) 等がある。動機と装置との対応関係は、言語によって異なっている。例えば、主題化は、日本語においては助詞を、英語においては語順を装置として使用するという違いがある。

本論文では、語用論的動機、とりわけ、(f) (g) (h) と言語装置との関係を重点的に紹介する。(g) は新-旧情報、(h) は日本語の助詞ハとガの対比、(f) では「視点」の問題を取りあげることになる。さらに語用論を障害児の言語運用という観点でとらえるこ

とにしたい。

まず、第1節では、新-旧情報について概念を整理し、それが語順、態、アクセント等の言語的装置を手がかりとして、どのように子どもに抽出されていくかについての実験を紹介し、談話における新-旧情報という文脈の変数が、個々の単文の文構造といかに交互作用するかについて紹介する。第2節では、言語学上で論争となっているハとガの問題に焦点をあて、日本語の主題の独自の構造を心理言語学的見地から明らかにする。ここでは、ハとガの多重機能性がどのような過程を経て獲得されていくかの全貌は明らかにしないまでも、現在までの研究の到達点が示されるであろう。ハとガが文のレベルと談話のレベルとの両方で機能的に分析されるべきであることが主張される。第3節では、話者が発話した文の視点が、どのような言語装置と共起しやすいか、どのような言語装置を利用しているのかが検討される。視点と関係のある多様な言語装置と視点との相互関係が発達的に明らかにされている。第4節では、言語の機能的使用に問題を持つ自閉児の言語発達の特徴について概観し、とりわけ語用論的な言語使用の障害について興味深い知見が紹介されている。伝達的な言語使用の困難という自閉児の特徴は、言語発達の研究における語用論的かつ機能的分析の重要性を示唆するものである。

I 心理言語学の分野における新-旧情報に関する研究

新-旧情報については、何人かの言語学者が少しずつ異なった定義をしている。また、ほとんど同じ概念に対して違う用語を用いているものもある。そこでまず、それらの用語と定義の代表的なものを表1に掲げておこう。いずれにしても、このような概念のもとに言語学的現象の説明を試みて成果をあげている。ここではそれらの研究の紹介はしないが、詳細は表1に掲げられた文献にあたられたい。

表1 新-旧情報の定義

著 者	用 語	定 義
Chafe (1970)	new information old information	new information とは、話し手が聞き手に初めて紹介すると考えている情報で、old information とは、発話の時点で既に話し手も聞き手も分けあっていると考えている情報である。
久 野 (1978)	新しいインフォメーション 古いインフォメーション	新しいインフォメーションとは、重要度が高い情報であり、古いインフォメーションとは、重要度の低い情報である（但し、この後久野は自説を変えるが、これについては次の項参照）。

久野 (1982)	新しいインフォメーション 古いインフォメーション	先行文脈から復元可能なインフォメーションを旧、復元不可能なインフォメーションを新と呼ぶ（但し、情報の重要度は別の概念として定義されている。詳しくは文献参照）。
Chafe (1976)	new information given information	new information とは、話し手がそれを話すことによって聞き手の意識の中に話し手が導入していると仮定する情報であり、given information とは発話の時点で聞き手の意識に存在していると仮定する知識のことである（但し Chafe は new-old と new-given の区別をしているのではなく、new-old の定義を変えたと見るのが妥当である）。
Firbas (1974)	rheme theme	rheme とは、コミュニケーションの展開に寄与する程度 (communicative dynamism) が高い要素で、theme とはコミュニケーションの展開に寄与する程度の低い要素である（ちなみに、Halliday 流の rheme-theme の定義は表2を参照されたい）。

言語学の分野における、それらの知見を踏まえて、心理言語学の分野でも、新-旧情報に関連する研究があらわれた。中でも子供の言語習得の過程において新-旧情報がいつ頃から、どのようにして弁別されるようになるのかという研究に重点が置かれているようである。この種の研究での先駆は Hornby (1971) によるものであろう。彼は英語を母国語とする 6, 8, 10 歳の児童を対象として、‘女の子が自転車に乗っている’ 絵と ‘男の子が馬に乗っている’ 絵を見せ、刺激文としては、

(1) 馬に乗っているのは女の子だ。

というような、どちらの絵とも完全に一致しない文を聞かせた。被験児にはあらかじめ「刺激文は間違っているかもしれないが、どちらの絵のことを言おうとしたのかあてなさい」と教示しておく。もし被験者が (1) の文が馬についての文だと考えるならば、‘男の子が馬に乗っている’ 絵を選択するだろう。‘……についての’ 文だと考えているということは取りもおさずその部分を旧情報だと考えていることだという Clark と Clark (1977) の主張に従えば、この実験によって子供が新-旧情報を弁別しているかどうかが明らかになると考えられる。Hornby の用いた刺激文には次の様なタイプのものが含まれている。

能動態

- (2) The boy is riding the bicycle.

Hornby は他に手がかりがない場合、語順によって新-旧情報が決定され则认为しているので、この場合、the boy と the bicycle を対照要素と考えるならば、the boy が旧情報で、the bicycle が新情報ということになる。

受動態

- (3) The bicycle is being ridden by the boy.

これも同様の理由で the bicycle が旧情報で、the boy が新情報と考えられる。

分裂文

- (4) It is the boy who is riding the bicycle.

これは文の形からして the boy が新情報で、その他すべてが、従って the bicycle が旧情報である。

疑似分裂文

- (5) The one who is riding the bicycle is the boy.

これも文の形から、the boy が新情報で、the bicycle が旧情報である。

強調アクセント

- (6) The boy is riding the bicycle.

この場合、強調アクセントの置かれた boy が新情報で、the bicycle が旧情報となる。

このように基本的には、新-旧情報の弁別の手がかりとしては、語順、特定の文形、強調アクセントがあったわけである。

実験は前述の通り、上記の刺激文のうち、旧情報のあらわれている絵を選ぶことが期待され、その反応率が高い程、新-旧情報の弁別がなされているものとみなされた。

この結果、疑似分裂文は最も早くから弁別がなされ、次いで分裂文、受動態、強調アクセントの順で弁別が行なわれるが、能動態の文でも年齢が上がるにつれて弁別されるようになった。

林部 (1979, 1980, 1983) は日本語を母国語とする 6 歳から 14 歳までの児童に対して、Hornby と類似の実験を行なった。実験の方法は全く同様で、用いられた刺激文は次の通りである。

疑似分裂文

- (7) エンピツを持っているのはイヌだ。

日本語では英語の分裂文に対応する文型がないので、このタイプの文を分裂文と呼ぶこともある。いずれにしても、'エンピツ' が旧情報で 'イヌ' が新情報である。

助詞「ガ」、「ハ」を含む能動文

- (8) イヌがエンピツを持っている。

- (9) イヌはエンピツを持っている。

久野 (1978) 等によれば、おおむね「ガ」は新情報を、「ハ」は旧情報をあらわす助詞

と考えられる。

強調アクセントを含む文

- (10) イヌがエンピツを持っている。

これは英語と同様、強調アクセントを付された部分が新情報で、その他の部分が旧情報と考えられる。

能動態の文で語順を変化させたもの

- (11) イヌがエンピツを持っている。

- (12) エンピツをイヌが持っている。

この場合、英語と同様に文頭に近い要素が旧情報で、文末に近い要素が新情報と考えられる(久野, 1978)から、(11)の文ではイヌが旧情報で、エンピツが新情報、(12)の文ではその関係が逆になる。これらをまとめると、新-旧情報の弁別の手がかりは、文形、助詞、強調アクセント、語順ということになる。

これらの刺激を用いた実験の結果、いちばん早くから弁別されるようになるのは、疑似分裂文の場合で、次いで助詞による弁別がなされるようになり、語順を手がかりとするものは、13歳以上ではじめて弁別ができるようになった。また、その年齢では、助詞よりも語順の方が手がかりとして優先されることも見出された。すなわち、

- (13) イヌがエンピツを持っている。

という文において、イヌが旧情報で、エンピツが新情報であると理解していると考えられる反応が多く出現するのである。

強調アクセントを付された文では、期待に反して、強調された部分を新情報とする反応はあらわれなかった。これは Hornby による英語の実験の結果と大きく食い違う点であり、林部も、これが英語と日本語における強調アクセントの役割の相違によるものなのかもしれないが、はっきりしたことは解らないとしている。

これらの実験結果を総合してみると、英語でも日本語でも、疑似分裂文がいちばん早くから新-旧情報弁別の手がかりとされることがわかる。また、単なる能動態の文で、語順のみを手がかりとした弁別は、比較的遅くならないと習得されないようだが、少なくとも日本語の場合いったん語順が手がかりとなると、それは助詞に優先されるものとなる。また、英語の場合、文自体の機能としては大変よく似たものであるはずの分裂文と疑似分裂文で、新-旧情報弁別の手がかりとしての習得の時期がかなり違っている。これは、おそらく分裂文では新情報が文頭に近い位置にあり、疑似分裂文では文末にあるという差によるものであろう。日本語の疑似分裂文でも、新情報は文末にあって、やはり習得がいちばん早い。このように考えてみると、語順のみによる新-旧情報弁別の習得は遅いものの、本質的には語順が重要な役割を果たしていると考えられるように思われる。

II 日本語における主題——ハとガの問題——

主題 (topic または theme) という概念は表2にみられるように多義的である。たとえば, Halliday (1970) は, (1) 1文内での見出し (heading) の役割と, (2) 旧情報を荷う役割の2つをあわせ持った複合的概念として主題をとらえている。日本語についてみると, 主題の定義は, 文構造の形式的特徴から明瞭に規定されうる。すなわち, Kitagawa (1982) のように「助詞ハを伴う名詞句」を主題とすることが, 国語学, 日本語学の共通認識となっているといつてよい。

表2 主題 (Topic/Theme) の定義

著 者	用 語	定 義
Crystal (1980)	topic	ある文の topic とは, それについて何かが言われるところの人, あるいは物のことである。 「心理的主語」とも呼ばれることがある。
Dubois <i>et al.</i> (1973)	topique	談話の主題 (thème) で, 事柄について何かを言う場合の, その事柄, 対話者の質問あるいは状況によってテーマとして与えられるもの。
	thème	断定文で, それについて何か (述語) が語られることになる直接構成要素 (名詞句)
Halliday (1970)	topic	topic は複合的概念であり, (1) theme と (2) given の2つの機能に分けられる。
	(theme)	「心理的主語」であり, 英語では最初の位置に置かれている要素であり, 「ここに私が言っていることの見出しがある」ことを意味する。
	(given)	回復不可能な情報として, つまり聞き手が自分自身でテキストや場面から引き出せないと予想されるような情報として話し手が扱う構成要素。
Kitagawa (1982)	topic	日本語の主題とは, 助詞「ハ」の付いた名詞句である。
Li & Thompson (1976)	topic	話されていることの領域の特定化の役割を持ち注意の中心であり, 談話のテーマを知らせるという役割を持つ。

日本語における主題についての問題は、係助詞ハと格助詞ガの用法上の比較を通して論じられることが多かった。Li と Thompson (1976) によれば、世界の諸言語の中では文の基本構造が、主語[†]—述語構造にある言語、あるいは主題—評言 (topic-comment) 構造にある言語というように、主題と主語のいずれかが優位になっているものが多い。主格の文法的標識 marker (日本語でいえばガ)^{††} と主題の文法的標識 (日本語のハ) とが同一言語内に共存しているのは、日本語の他に朝鮮語を挙げうるのみであるという。ハもガも通常、文頭の名詞句に付き、西洋文法でいう、いわゆる主語に相当する役割を荷うと考えられがちであるが、実際には両者の統語論的、意味論的、語用論的機能は、対照的な性格を持っている。外国人が日本語を学習するとき、獲得のきわめて困難な問題の一つに、このハとガの使いわけが挙げられている。根本的な問題は日本語を教授する側に、ハとガの機能についての理論的整理ができていないことである。

1 ハとガの機能

ハとガの機能上の差異は、これまでに国語学、日本語学の分野で論争が行なわれてきているが^{†††}、未だ定説をみない。両方の助詞とも、その機能が多重であることが問題を複雑にしている。本論文では、ハとガの機能を、文 (sentence) と談話 (discourse) という2つの分析単位に基づいてとらえようと試みる。ここでいう談話 (または文章) とは、文より上位の言語単位であり、継起する文の連鎖からなる発話を指す。統語論は、文を分析対象とし、談話文法は談話を分析対象とする。

文におけるハとガ

文は基本的に、命題 (proposition) と法態 (modality) の2要素から成るとみなしうる (Fillmore, 1968)。命題とはモノの存在、性質、動作、関係などをあらわす部分であり、法態とは、その命題に対する話し手の判断や態度をあらわす部分である。この点からみると、ガは命題部分にのみかかわるといえる。すなわち、それが付いた名詞句の述部に対する主格 subjective/nominative という表層上の格関係を標示する。そして主格は通常 (受動文等を除いて) 動作主や経験者等のような、述部に対する主体的な意味関係をあらわす。ガは格関係を標示する格助詞であり、ある命題の中でそれが付く名詞句と述語との関係を示す他の格助詞、たとえば、ヲ、ニ、デ、ト、ヘ等と同じグループに属する。

ハは、ガのように格関係を標示する機能を持たない。ハは、話し手の主体的な態度の

† ‘主語’の規定については Keenan (1976) を参照のこと。

†† いわゆる目的格のガ (例: 水が飲みたい) は本論文では取り扱わない。

††† 文献は数多いが、概観のためには月刊「言語」1975年3月号、同1977年6月号を参照のこと。なお論争の一つに、ガの付いた名詞句を文の主語と呼ぶのか否かの問題がある。本稿では、この問題に直接言及することを避け、ガを主格という用語で説明する。

表現を荷うところの法態の部分にかかわって主題を標示する。すなわち、ハを伴う名詞句は述語に対する格関係を明示するのではなく、1文内では文末の法態部分（助動詞や終助詞）に呼応するのであり、ハは格助詞ではなく係助詞なのである。吉本（1982）は、「名詞句+が」は文表現の素材の側面に属し、「名詞句+は」は素材に対する言語主体の働きかけを示す陳述の側面に関わり、「が」はそれが付く名詞句と述語との関係を示し、述語との結びつきは1回きりである。「は」を伴う名詞句は、主題として、文末の陳述に呼応する[†]と述べている。Fillmore 流に言うならば、「素材」とは命題のことであり、「陳述」とは法態のことである。

(1) 太郎がアルバイトで稼ぐお金で暮らしている。

(2) 太郎はアルバイトで稼ぐお金で暮らしている。

(1) では、「暮らしている」という陳述部分に対する主体は太郎でなくともよいが、(2) では太郎に限定される。

(3) Ken gave a book to Naomi.

(4) 健が 直美に 本を やった。

(3) という命題を表現するために格助詞は(4)の下線部のように強制的に決まり、動詞「やる」の場合、ガは健という動作主にしか付きえないが、主題の助詞ハは、3つの名詞のどれにも付きうる。

(5) 健は 直美に 本をやった。

(6) 直美は 健が 本をやった。

(7) 本は 健が 直美にやった。

どの名詞がハによって主題化されるのかは、格関係によるのではなく、発話された場面や話し手と聞き手の共有知識や、先行の談話等々の言語的、非言語的文脈に規定されるのである。そこで、ハの機能は、1文中で吟味されるのではなく、むしろ談話において分析されることによってこそ明らかにされうる。

談話におけるハとガ

話し手にとって、談話におけるハとガの使い分けのために通常重要なことは、話し手が名詞句であらわそうとしているある項目を聞き手がすでに知っている情報（既知あるいは旧情報）か、未知あるいは新情報とみなすかである（前節参照）。ハを伴う名詞句は、通常旧情報であり、ガなど格助詞がついた名詞句は通常、新情報があらわされている[†]。

† ただし、ハが必ず旧情報をあらわすとは限らない。

(1) 談話の冒頭文にハ名詞が出てきた時にそれが新情報である場合がある（久野，1973；吉本，1982）。

(2) 対照をあらわすハの用法の時にも新情報に付く場合がある。

私はイチゴは好きだが、モモはきらいだ。

ガもまた、必ず新情報に付くとは限らない。たとえば、次の文のように総記（該当物の列

旧情報は主題化されずに省略され、文中に表現されないことも多い。

ハとガの動作主性

ハとガの区別をわかりにくくさせているのは、両者とも、英文法でいういわゆる主語に相当し、述部に対して最も重要な名詞句となることであろう。そして意味論的には、たとえば述部が他動性を持つ動作をあらわす動詞 (e. g. たたく, 押す etc) であった場合、ガの付く名詞句は通常、動作主, すなわち、その動作の主体をあらわす。ハは主格を標示する機能を持たないにもかかわらず、多くの場合、ハの付く名詞も同様に動作主をあらわす。このようなハとガの性質を動作主性 (agentivity) と呼ぶことにする。伊藤 (1982) は、ハとガの動作主性を、日本人、日本語—英語バイリンガル、英語—日本語バイリンガル、米人日本語学習者について、実験的手法を用いて調べた。2つの名詞句と1つの動詞からなる文に対して、ハまたはガの付いた名詞が選択される率を表3に示す。日本人の場合、ガの動作主性はハの動作主性よりもはるかに強い ($F > E$) が、バイリンガル2群では、両方の動作主性は少し接近しており、日本語学習者群では逆転している。日本語を第2言語として学習する際に、ハとガの区別が獲得困難なものの一つであることは以前から指摘されているが、本研究からも改めて示唆される。

表3 ハまたはガの付いた名詞句が動作主として選択された率 (伊藤, 1982 より)

	A ガ名詞句 対 B 助詞なし名詞句		C ハ名詞句 対 D 助詞なし名詞句		E ハ名詞句 対 F ガ名詞句	
	A を選択	B を選択	C を選択	D を選択	E を選択	F を選択
日 本 人	98	2	84	16	17	83
日 — 英 併 用	86	14	80	20	38	62
英 — 日 併 用	84	16	81	19	32	68
日 本 語 学 習 者	75	25	76	24	65	35

(単位は%)

／ 挙) をあらわす場合には、新-旧情報に関係なく、ガの付く名詞が用いられる。

太郎と次郎が兄弟なのです。

しかし、本論文では、これらの例外をふまえつつも、ハとガによる新-旧情報の標示という談話機能を中心に考察する。なお、本論文脱稿後、この注で指摘した問題を総合的に説明する新-旧情報の規定として、田原と伊藤 (1985) があるので参照されたい。この論文では新-旧情報と未出、既出との違いを強調している。

2 ハとガの獲得過程

ハとガの出現

日本語幼児は、いつごろから、どのように、ハとガの2つの助詞を使い始めるのだろうか。大久保(1967)の観察によれば、ハの初出は1歳6カ月以前であり、ガの初出の1歳9カ月より先行する。しかし、宮原と宮原(1973, 1976)の観察では、生後16カ月に2語発話が出現し、18カ月時に終助詞ネ、ヨ等が出現した後、生後20カ月目にほとんど同時期にガとハが2語発話の中にあらわれたとしている。ガは、「主語 ga+自動詞」文と「主語 ga+他動詞」文とで使われ、自動詞文では、主語にあたるのは有生名詞と無生名詞のいずれかであるが、他動詞文ではすべて有生行為者であったという。ガが2語発話の文型で使用されるのに対し、ハは、そのほとんどが、「カミハ?」「コレハ?」等「NP-wa?」の型で発話される。宮原らは、このハの機能を主題標識であるとし、主題となる対象名詞句を疑問形で表現することから始めると解釈した。Scollon(1977)のように、大人—子供の1語文のやりとりの中で2語文の発生をみるような見地を発展させて、主題—評言という完結した1文が大人—子供間で成立するという観点からすれば、上記の解釈が妥当かもしれない(ハの機能は、そもそも談話機能が主要であるから)。あるいは、この発話を「名詞句+wa」という2語発話とみると、ハは相手に答えを促す疑問標識の語(あえていえば終助詞)であるとみなすことも可能であろう。しかし、前田(1977)の観察によれば、1歳8カ月時に「オートチャンハガッコー」、1歳9カ月時に、「ベンキョー、ココ、オトウチャンハ」といったハを含む平叙文の発話が出現している。初期の発話におけるハとガの機能については、今後の研究をまたねばならないが、両者とも、1歳後半には出現していることで、以上の3つの研究に共通点がみられる。

幼児期のハとガ

幼児期におけるハとガの使用について、Miyazaki(1979)は野地(1976)の資料を分析した。ガは2歳4カ月以前は60%以上脱落していたが、2歳10カ月以降は10%台以下の脱落率となり、大人(10.2%)に割合が近づくことより、この時期を獲得の時期としている。一方、主題のハは、大人の脱落(省略)率が25.5%であるのに対して、子どもは2歳1カ月から5歳12カ月まで脱落率がいずれの年齢でも52.0~100%の範囲であり、新情報に対しガを使用するという関係が成立している子どもであっても、旧情報にハを使用する関係ははっきりと成立していない。しかし、対照の用法のハは、3歳7カ月以降脱落率が低い(15.6%)ことより、その頃に獲得のきざしがみえていているとしている(大人の脱落率は0%)。この研究の問題点を挙げるならば、それは脱落率を指標に取っていることである。特に幼児においては、助詞ハ、ガ等が省略された形も、大人によって受容される。また、助詞の欠如を必然的に脱落したものとみなすのか、意図的に省略したものとみなすのかの区別もむずかしい。秦野(1976, 1979)は自由再生課題と模倣完成課題によって3~7歳児のガとハの発話を調べた。ガの使用は4歳児でも行なわれているのに対し、「___ハ___ガ」構文では7歳児では正答が急増した等、新情報に対す

るガの使用の開始時期（4歳～）が、旧情報に対するハの使用開始時期（6歳以上）よりも先行することが示された。

学童期以降におけるハとガの区別

前節でも紹介したように林部（1979, 1983 a）は、小学校1年生～中学校2年生に対し、実験的方法によって新-旧情報の区別をハとガの対立と分裂文とにおいて調べた。小学校高学年になると、新-旧情報の差が反応の差をもたらし、中学生になって初めてハとガを手がかりとする新-旧情報の弁別が可能であった。近藤（1977）は、新-旧情報をハとガで区別して文生産できるかどうかを年中児、年長児で、小2、小4、大学生について調べ、大学生の群のみが文産出上、旧情報に対しハを付けることができたことを見出した。小学校高学年～高校生のデータを取り扱っていないのがおしまれる。

ま と め

以上みてきたように、主格をガで標示することは比較的容易であるが、談話レベルで新-旧情報をハまたはガ（あるいは他の格助詞）によって的確に標示することは、かなりむずかしい課題であることがわかってきた。BatesとMacWhinney（1979）によれば、新-旧情報の区別とその表層化は、言語発達のかなり早期から行なわれている。日本語児の場合、なぜガとハを談話レベルの標識として使いわけを獲得することが遅れるかについては、（1）ガとハの機能的多重性、（2）ガとハの省略が（特に幼児の発話に対して）受容されること、という理由が考えられる。機能的多重性を持つ語の獲得の困難さと複雑性については、Karmiloff-Smith（1979）がフランス語児の限定詞の獲得について例証している。

また、省略可能な機能語の獲得が遅れることは、Slobin（1982）が4カ国の幼児の文法獲得の比較によって明らかにしている。日本語独得の問題であるハとガの獲得過程のさらなる研究は、日本語の構造の機能的分析に対する寄与のみならず、言語獲得の一般理論への基礎資料となる道に通じている。

Ⅲ 視 点

視点ということばは、我々がよく日常使用する用語である。これは、観点という語に近い。たとえば、ものの見方を変えることを視点を変える等と言う。同様に、文学を論じる際にも、この語はよく使用される。それ故、かえって、この語は明確な定義を持たず、他の現象を説明するためのプリミティブな概念、つまり、それ自身は説明される必要がない概念となっていた。

ところが、近年になって、視点自体が説明されるようになってきた。久野（1978）は、視点を単に文学作品研究における「自己同一視化」現象、あるいは「感情移入」現象とする見方に満足せず、日常使用言語の文法レベルで考察した。彼は、話し手がどこにカメラを置いて発話内の出来事を描写しているかの問題として視点を扱い、共感度の高い

名詞句に視点が置かれやすいことや、単一の文では、単一のカメラ・アングルしか持たえないこと等を指摘した。また、視点という語は使用していない場合もあるが、同様の現象を扱った日本語研究には、宮地 (1965)、森田 (1968)、大江 (1975)、牧野 (1978) などがある。

心理学研究において、視点という語が使用され始めたのは、やはり久野の影響が大きい。視点によって示されるような現象自体はもっと早くから研究されていた。例えば、態 (voice) に関する研究 (Turner & Rommetveit, 1968) は古くからなされているし、ダイクシス (deixis)[†] に関する研究も Clark (1976) たちを中心に多く行なわれている。また、Ertel (1977) は、視点という語こそ使っていないが、同様の現象を準拠点 (reference point) としてそれを定義し、その心理学的実在性を確認すべく、いくつかの実験を行なっている。彼は、主語を説明するためにこの概念を使用しており、文構成の際、話し手の自我との近接性が高い要素が主格化 (nominal seizing) を受け、それが文の主語となるとしている。

本章の目的は、心理学における視点研究を概観することであるが、その際ふたつの点を考慮する必要がある。ひとつは視点を決定する動機と装置は何か、ということである。ここでは、視点を動機づけるものとして、動作主格 (agent)・起点格 (source) [ふたつで1セットになっている (影山, 1974)。以下 AS と略す] と旧情報をとりあげる。また、視点を言語化する装置としては、文頭化、語彙の持つ共感性の高さ、視点動詞の使用をとりあげる。他方、視点のある要素に置くことが、どのような心理的な効果を生むものなのか、言語伝達上の役割を明確にすることも重要である。以下 (1) で前者を、(2) で後者を扱う。なお、できる限り、実験例は日本語を対象としたものを中心に紹介する。

1 視点の決定——動機と装置

視点がある名詞に置かれているとする時、どのような条件がそれを制御しているのだろうか。ここでは、視点を決定させる動機と装置をいくつかとりあげる。

動作主格・起点格と視点

AS の名詞はそうでないものよりも視点が置かれやすい。このことは、一般に、AS と視点が同じ名詞に置かれている能動文が、被動作者格 (patient)・終点格 (goal) (以下 PG と略す) の名詞に視点に置かれている受動文よりも理解されやすいという事実 (Turner & Rommetveit, 1968; Sano, 1977; Hakuta, 1982; 石黒, 1983) に端的に示されている。また、更に石黒 (1935 a) によれば、「あげる」文が「くれる」「もらう」

† ダイクシスとは、ある種の言語形式のもつ発話の場にいなければ十分な理解ができないという性質である (田中, 1981)。ダイクシスには、人称のダイクシス (person deixis)、場所のダイクシス (place deixis) 等がある (村田, 1982)。

文よりも理解されやすいのは基準型（～ガ～ニ～スル）の場合だけであり、逆語順（1）の場合、

（1） パンダにイヌがみかんをあげる。

には、他の動詞とほとんど差がないことが幼児において示された。このことから幼児は、文頭名詞をASであり、かつ視点であるとみなす方略をとりやすいことが推測できる。いずれにせよ、このようなASに視点が置かれやすいという事実は、知覚上、ASがドミナントであることに対応していると思われる（Robertson & Suci, 1980; Segalowitz, 1982）。

旧情報と視点

久野（1978）は、このことを談話主題の視点ハイアラキー（2）のように定義している。

（2） 談話に既に登場している人物に視点を近づける方が、談話に新しく登場する人物に視点を近づけるより容易である（p. 148）。

（3） 私は太郎を子どもの頃からよく知っている。そんな太郎が誰かになぐられたという……。

（4） 私は太郎を子どもの頃からよく知っている。そんな太郎に誰かがなぐられたという……。

例えば（3）（4）の両文とも既知情報は‘太郎’であり、新情報は‘誰か’である。この場合、受身の、助動詞‘～られる’の視点制約によって‘が’がつく名詞に視点が置かれるのが普通であるが、（4）では、それが新情報の名詞となっているため、文全体の適格性が低くなっている[†]。

文頭名詞と視点

文頭は、言語の持つ本質的な特徴である線状性に基づいて非常に重要な位置である（Halliday, 1970; Daneš, 1974）。視点もその例外ではなく、文頭に視点は置かれやすい。例えば、太郎と花子が会う場合は、（5）（6）（7）の様に3つの形式で記述できる。

（5） 太郎が花子に会う。

（6） 花子が太郎に会う。

（7） 太郎と花子が会う。

これらは、全て同じ論理内容を表現しており、その差は視点にあると言える。林部（1983 b）は、このような視点の表層上の位置を検証するため、大人を被験者として、登場人物の一方を自分自身とみなすという条件（主観条件）と第三者の立場（客観条件）

[†] 本論文脱稿後、視点と情報構造の関係について石黒（1985 b）、Ishiguro（1985）が刊行された。前者は大人の書記テキストを、後者は幼児と大人の口頭テキストを分析している。なお、後者では、情報構造だけではなく、主題や話題内容と視点との関係も議論されている。是非参照されたい。

で、絵を説明させ、その語順を調べた。その結果、話し手の視点の置かれた語は、そうでない語よりも文頭よりに位置することが明らかになった。

語彙共感度と視点

語彙共感度とは、話し手、聞き手の自我とある語彙との近接性の度合を言う。同じ人を呼ぶ場合に、あの人、彼、等と呼ぶのとその人の名前を呼ぶのでは、後者の方が話し手にとって近接性が高いと言える。また、自分の弟を弟と呼ぶのと、彼と呼ぶのでは、前者の方が近接性が高い。この様に、近接性のより高い文中要素、すなわち、語彙共感度の高い名詞には視点が置かれやすい。このことは、視点制約を持つ視点動詞（後述）「もらう」を含む文において格助詞ニの付いた名詞に語彙共感度の高い語を挿入すると不適格文（9）となることから明らかである。

（8） 私が太郎に本をもらう。（適格文）

（9） 太郎が私に本をもらう。（不適格文）

石黒（1983）は、語彙共感度が文理解に及ぼす影響を幼児を対象として調べた。それによると、動詞が視点に関してほとんど制約を持たない能動文では、語彙共感度は何ら効果がなかった。それに対し、受動文では、年長になる程、PGと視点が同じ名詞に置かれた文程、理解されやすかった。例えば、（10）は（11）よりも理解されやすい。

（10） ○○（被験者名）がイヌにさわれた。

（11） イヌが○○（被験者名）にさわれた。

これは、受動文を作る助動詞「られ」るによる視点制約、つまり、PGの名詞に視点を置くのが標準的であるとする制約に、語彙共感度の高さが合致した結果であると言える。これらのことから次のことが明らかになる。語彙共感度は単独ではほとんど文理解に影響しない。すなわち、視点に対する制約は弱い。動詞の視点制約と共起する場合に文理解に影響を及ぼす。逆に語彙共感度が動詞の視点制約と共起しない場合、すなわち、動詞によって視点が置かれるのが自然であるとされる名詞以外の名詞の語彙共感度が、文中でいちばん高い場合には理解されにくい。しかし、この結果は、理解実験によるものであり、その語彙共感度は実験者が任意に導入したものである。その点、語彙に対する強い共感をうることはむずかしい。従って発話実験の結果もみる必要があろう。

視点動詞と視点

視点動詞は、授受動詞や往来動詞、それに受身の助動詞等の様に、義務的に視点となる名詞を決定する動詞を指す。例えば、授受動詞構文の適格性は次の様に語彙共感度の高い名詞を挿入してみることによってチェックできる（12, 13, 14, 15）（ただし、方言差があるので、その制約の強さは相対的なものである）。

（12） 私が太郎に本をあげる。（適格文）

（13） 太郎が私に本をあげる。（不適格文）

（14） 私が太郎に本をくれる。（不適格文）

（15） 太郎が私に本をくれる。（適格文）

Uyeno ら (1978) によれば、復唱課題において幼児は、「くれる」を含む文を「あげる」を含む文に変化させやすい。このことから、文の基準型が同じ格配列 (AS→PG) をしている両文の理解に差を生じさせているのは、視点の効果であると考えられる。また、同様の視点動詞である「いく」「くる」の習得に関しては、上野ら (1979) が幼児・児童を対象に実験をしており、その結果から、「いく」が「くる」の習得に先だち、両者の完全な理解は、小学校高学年になるまでなされないことがわかっている。

以上、視点の動機と装置をいくつかとりあげたが、それで全てではない。今後更に解明していく必要がある。また、それら相互の関係、例えば、そこには、優先順位のようなものがあるのかどうか等も、今後検討されるべきである。

2 伝達における視点の役割

本節では、言語表現上、視点がどのような役割を果たしているのか、どんな効果を生じさせるものなのか、視点の存在意義を考えてみたい。まず、挙げられるのは、文学研究によって示されてきた感情移入効果であろうが、ここではとりあげない。このいわば、視点の感情面への効果に対して、認知面への効果もある。つまり、談話の一貫性 (coherence) を保持するものとしての役割である。この一貫性をもたらすものとして、指示 (reference) などの表層装置の役割が指摘されているが、視点はいわば内的に機能しているのである。Black ら (1979) は、文の視点を先行文と変えた場合、つまり一貫性をなくした場合、読み手は、記憶内で本来の望ましい、すなわち先行文と同じ視点に文を修正すると考えた。

(16) Alan hated to lose at tennis.

Alan played a game of tennis with Liz.

After winning, she came up and shook his hand.

(17) Alan hated to lose at tennis.

Alan played a game of tennis with Liz.

After winning, she went up and shook his hand.

例えば、(16) では、Alan の視点から全ての文が語られているが、(17) では、3 つめの文で視点が Alan から Liz (she) に変化しているため、再生の際、先行文と同じ視点 (Alan) に変わり、その結果 (16) と同じテキストになると予想されるのである。彼らは、読み時間、理解しやすさの評定、再生、編集の各課題において、この仮説を実証した。

ここまで、視点の伝達上の役割を述べてきたが、このことには注意が必要である。つまり、「理解する」ということをどの様にとらえるのかによって視点の効果は異なる。佐伯 (1982) が指摘した様に、視点がずれていても文の論理関係は把握可能なのである。例えば、(18) で、「くれた」と「あげた」を誤って交換させていることは誰にもわかることであり、それゆえ、論理関係自体は正確にくむことができる。だが、この理解はその文の持つ微妙なニュアンスを伝えていない。つまり、補助動詞「一てあげた」「一てく

れた」の心理的な差が反映されていないのである。この様に、いわば、高次の理解が必要となるテキスト（例えば詩）では、視点の効果は大きいものとなるのであろうが、命題の伝達を中心とする日常の報告文等ではあまり重要性を持たないものとも言えるかもしれない。

(18) 僕が庭のそうじをしていたら、近所のおじさんがほめてあげた。

日常の会話の中で、(18) の様な言いまちがいがよく起こることではあるが、それが会話の流れを止める様なことはあまりない。それには、文脈、状況からの推論が働いていることが大きな要因であろうが、同時に理解の質の違いによるものとも考えることもできよう。この様な、視点が独自に伝達に及ぼす心理的效果は、今後さらに検討される余地がある。

IV 自閉症児

1943年、Kannerによって、自閉症候群[†]が記述されて以来、自閉症児における言語の異常が注目され、現在では、主要な診断基準の一つに数えあげられている。従来、自閉症児の言語の異常に関しては、反響言語・字句拘泥（literalness）・人称代名詞の逆転・反復的な質問・場面に不相応な発語等が指摘されてきた。しかし、こうした言語の異常は、症状記述の際の観察者の印象的、あるいはエピソード的な指摘の観があるように思われる。

しかるに、最近の研究動向を見ると、従来の印象的、エピソード的な記述ではなく、統語論・意味論・語用論・音韻論の見地から、言語の異常性に迫る研究が散見される。これらは言語学的見地から、自閉症児の言語の異常性に、組織的にアプローチしようとする試みであり、そこでの問題提起は、自閉症児の言語の異常は、言語のあらゆる側面に及ぶグローバルなものなのか、あるいはいくつかの側面が選択的に障害されているかどうかということになっている。

研究数は少ないけれども、今までの研究によれば、自閉症児[‡]は、統語論の面では、健常児、知能障害児に比べて遅れはあるものの同じ発達経過を辿るということ、意味論及び語用論の面の障害が顕著であること、が明らかにされつつある。

本章では、自閉症児の統語論と意味論についてまず紹介し、次に近年とみに注目されつつある語用論に触れてみたい。

† 自閉症児の規定については、様々な議論があるが、現在はおおむね以下の4つの基準が使われている。(1) 社会的関係を発達させることにおける重篤な障害、(2) 儀式的、あるいは強迫的な行動、(3) 言語発達の障害、(4) 発症が30ヵ月以前。

‡ 自閉症児の言語能力は幅広く、話し言葉を持たない自閉症児から、日常の会話程度ならこなせる自閉症児まで広がっている。ここで取りあげた自閉症児は、知的にはあまり障害されておらず、しかも比較的高い言語能力を持つ子どもである。

1 統語論と意味論

まず、機能語の獲得に関しては、冠詞・助動詞・代名詞・前置詞の欠如が指摘されている (Cunningham, 1966; Wing, 1975)。こうした機能語の欠如は、正常の言語発達の初期段階でも指摘されているが、自閉症児の場合は、それが長期に及ぶということが特徴である。また、Bartolucci ら (1980) の研究によると、課題強制文脈 (物語課題) の中で、自閉症児群は、ほぼ全ての機能語をかなり頻繁に発話している。しかし、自閉症児の最も使用困難な語は、過去時制や現在進行形における動詞の語尾変化であることを報告している。

構文に関しては、Pierce と Bartolucci (1977) および Bartolucci 他 (1980) の研究に見られる。彼らは、非言語性精神年齢が等質の自閉症児群、知能障害児群、健常児群の自発的な発話を、文法範疇と変形規則の観点から分析している。文法範疇では、代名詞・否定語・接続詞等があり、変形規則では、疑問文を生成する時のような文成分の再配列、及び埋め込み文、分裂文を作る時のような規則があり、文法構造の複雑さの度合いを扱った。それによると、自閉症児群は、健常児群に比べて、文法カテゴリー及び文法構造の複雑さで劣っているものの、文法体系は規則に従っており、健常児と実質的に異なっていないことが指摘されている。

次に意味論に関してであるが、これを組織的に扱った研究は、Simmons と Baltaxe (1975) の研究が唯一のものであろう。彼らは、構造化された面接場面から、発話を収集、分析し、様々な意味論上の誤りを分類している。それらの中から、2～3例を挙げると以下ようになる。

a 前出の語の不適切な指示

Mankind is considering—He is considering. (正しくは、Mankind の代名詞化に it を使用しなければならない。)

b 正しい語と正反対の語の使用

He is getting rarer and rarer because so many of them are left. (正しくは、many の代わりに few を使用しないと意味が通らない。)

c 正しい語と意味上、若干似通っているが不適当な語の使用

The only sport I like is drawing. (正しくは、sport の代わりに、hobby を使用しなければならない。)

その他にも意味論上の誤りを7つの範疇に分類して報告している。

2 語用論

この面に関する障害としては、まず、ダイクシスの問題が挙げられる。ダイクシスとは、場所・人物・時間に応じて、その意味が変化するものであり、これ・あれ・それ等の場所のダイクシス、私・あなた・彼等の人称のダイクシスがある (村田, 1982)。これらのダイクシスは、固定した指示対象を持たず、話し手—聞き手間の関係や会話の文脈

に応じて、意味が変化するものであり、それらを産出したり理解するためには、他者の立場を考慮する必要がある (DeVillers & DeVillers, 1974)。他者の立場、話し手—聞き手間の関係及び会話の文脈を十分に考慮できない自閉症児は、このダイクシスの面で著しい障害が指摘されている。岩井 (1982) は、CA 5 歳 10 カ月から 12 歳 5 カ月の自閉症児 5 名を対象にして、場所のダイクシスの使用について報告している。それによると、「これ」と言うべきところを「あれ」と表現したり、「あっち」を「こっち」、「こっち」を「あっち」、「あれ」を「これ」、「これ」を「それ」、「それ」を「これ」と誤って表現していることが報告されている。

次に、字句拘泥の問題が挙げられる。この問題は、事例報告の中で、しばしばエピソード的に述べられることが多い。例えば、返事をしないので、「舌がないのか」と言われて、心配気に自分の舌を捜し始める (Wing, 1975)。走っていて、疲れたので途中で歩き出し、「こら、歩くな」と言われて止まってしまう。ダンボールでロボットを作っている最中、「ここに絵を描いて」と言われて、「え」という文字を書いてしまう等が挙げられる (以上 2 例は筆者の観察)。これら 3 例とも意味論的な誤りはない。しかし、発語の意味とそれが発せられた文脈との関係を理解できないのである。発話文脈との関係を考慮するならば、発話の意味を額面通りに受け取らないはずである。

Cromer (1981) は、5 名の自閉症児の語用論を扱った Baltaxe の研究を紹介し、談話の規則と新-旧情報の区別の障害を指摘している。談話の規則とは、年長及び年少者との言語的やり取りを支配する社会的規則のことであり、この規則が獲得されていないために、症児の発話は、しばしば不作法であったり、適切さを欠くとしている。また、新-旧情報の区別の障害は、代名詞の欠如・定冠詞 (the) の誤用に認められる。旧情報を指示するのに、代名詞の使用が期待される文脈の中で、そのまま名詞を使用したり、さらに、わざわざ名詞句で詳述化したり、そのために発話に冗長さが目立ったとしている。

自閉症児では以上の発話のほかに、様々な障害が予想される。例えば、Searle (1975) の主張する、間接的言語行為の問題がある。「この部屋はとても寒い」という文は、その発せられる文脈に応じて、事実の陳述にもなるし、部屋の温度をもっと上げて欲しいという依頼文にもなるし、もし窓が開いているなら、窓を閉めろという命令にもなりうる。この種の文が発せられた場合、自閉症児は、文脈に応じて、臨機応変に対処することに、多大の困難を示す場合が多い。これは、既述の字句拘泥の現象と同じ根をもつものと言える。

更に前提の見地から、症児の言語にアプローチすることも今後の課題である。ここでいう前提とは、ある文の意味を理解するのに必要とされる前置きの文を言う。Rees (1978) が指摘するように、(1) 飛行機が山に衝突した、(2) 生存者は誰もいなかった、という文において、(2) の文の意味は、(1) の文の情報に依存し、(1) なしでは (2) は完全に理解されえない。こうした前提は、話し手—聞き手間の共有された知識に依存する。仮に聞き手が飛行機事故の新聞を読んでいる文脈であれば、前提がなくても、

(2)の文の意味は完全に理解可能であろう。しかし、聞き手が飛行機事故について何も知らないと予想されるなら、話し手は前提となる文を提示しなければならない。

このように、前提の問題は、会話における話し手と聞き手の間の共有した知識に依り、話し手は常に聞き手の知識を予想し、それによって、前提を省略したり、提示したりしなければならないのである。

自閉症児は、従来から、場面に不適切な発話や意味不明の発話が指摘され、そうした発話は、非伝達的なものとして扱われる傾向があった。しかしながら、そうした発話をそれが発せられた文脈から仔細に検討してゆくなら、伝達的な発話ではあるが、前提が欠如した文もあるはずであり、単に非伝達的なものとして片付けられないであろう。

以上、言語の語用論の側面に関しては、事例報告や日常の観察から、その障害が示唆されるものの、組織的な研究はほとんど為されていない。自閉症児の言語の本質を明らかにするためにも、今後、この方面からの研究が待たれるのである。さらに、語用論の側面に問題を持つ子どもの言語を研究することによって、語用論を構成する要因が明らかにされ、語用論の本質が一層明確になると思われる。

お わ り に

機能主義的な立場からの言語獲得研究の到達点について、新-旧情報、ハとガ、視点、自閉児の言語の4つの領域を中心に紹介した。いずれの領域も研究の蓄積が豊富であるとはいえず、むしろ今後の発展が期待される分野であり、本論文は過去の諸研究の詳細な展望というより現状の素描に留まった感は否めない。最後に強調しておきたいのは、機能主義的な立場と機能分析の方法の重要性である。機能主義的立場は、言語行動の側面のみを対象とするのではなく、伝達内容と発話意図との関係や、談話の流れと統語論との関係、場面と発話との関係等、複数の要因の相互関係を明らかにしようとするものである。このようなアプローチは、従来の1つあるいは少数の条件を抽出し、他条件を統制条件の名の下に切り捨てがちな方法よりも、実際の言語行動に対して、より現実の生活場面に即したものとなる。すなわち、言語行動それ自体だけでなく、それが行なわれる環境の諸要因を考慮に入れた研究こそ、現実の言語による伝達行動の解明に寄与するものであろう。一方、現実生活場面での言語行動の解明のために、自然観察法やそれに近い状況での言語行動を記述するという立場がある。これに対して、そのような立場の研究でえられた知見を参考にしつつも、むしろ実験的統制を加えて、多岐にわたる言語機能の諸成分を構造的に明らかにしようとする方法に、機能主義的アプローチは重点をおいている。しかし、実験的手法で得られた知見を再び現実生活場面に照合して吟味することは、とりわけ言語機能を重視する機能主義的観点において大切なことである。

文 献

- Bartolucci, G. Pierse, S. J., & Streiner, D. (1980) Cross-sectional studies of grammatical morphemes in autistic and mentally retarded children. *Journal of Autism & Developmental Disorders*, 10, 39-50.
- Bates, E., & MacWhinney, B. (1979) A functionalist approach to the acquisition of grammar. In Ochs, E., & Schieffelin, B. (Eds.) *Developmental Pragmatics*. Academic Press, Pp. 167-211.
- Bever, T. G. (1970) The cognitive basis for linguistic structures. In Hayes, J. R. (Ed.) *Cognition and the development of language*. Wiley, Pp. 279-362.
- Black, J. B., Turner, T. J., & Bower, G. H. (1979) Point of view in narrative comprehension, memory, and production. *Journal of Verbal Learning & Verbal Behavior*, 18, 187-198.
- Chafe, W. L. (1970) *Meaning and the structure of language*. University of Chicago Press.
- Chafe, W. L. (1976) Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of views. In Li, C. N. (Ed.) *Subject and topic*. Academic Press, Pp. 25-26.
- Clark, E. V. (1976) From gesture to word: On the natural history of deixis in language acquisition. In Bruner J. S., & Garton, A. (Eds.) *Human growth and development*, Oxford University Press.
- Clark, H. H., & Clark, E. V. (1977) *Psychology and language: An introduction to psycholinguistics*. Harcourt Brace Javanovich.
- Cromer, R. (1981) Developmental language disorders: Cognitive process, semantics, pragmatics, phonology, and syntax. *Journal of Autism & Developmental Disorders*, 11, 57-73.
- Crystal, D. (1980) *A first dictionary of linguistics and phonetics*. Andre Deutsch.
- Cunningham, M. A. (1966) A five-year study of the language of an autistic child. *Journal of Child Psychology & Psychiatry*, 7, 143-154.
- Daneš, F. (Ed., 1974) *Papers on functional sentence perspective*. Mouton.
- DeVilliers, P & DeVilliers, J. (1974) On this, that, and the other: Non-egocentrism in very young children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 18, 438-447.
- Dubois, J., Giacomo, M., Guespin, L., Marcellesi, C., Marcellesi, J.-B., & Mevel, P. (1973) *Dictionnaire de linguistique*. Librairie Larousse. (伊藤 晃・林部 光一・福井芳男・丸山圭三郎編訳 1980 ラルース言語学用語辞典 大修館書店)
- Ertel, S. (1977) Where do the subjects of sentences come from? In Rosenberg, S. (Ed.) *Sentence production*. Lawrence Erlbaum Associates, Pp. 141-167.
- Fillmore, C. (1968) The case for case. In Bach, E., & Harms, R. T. (Eds.) *Universals in linguistic theory*. Holt, Rinehart & Winston, Pp. 1-90.
- Firbas, J. (1974) Some aspects of Czechoslovak approach to problems of functional sentence perspective. In Daneš, F. (Ed.) *Papers on functional*

- sentence perspective. Mouton, Pp. 11-37.
- Hakuta, K. (1982) Interaction between particles and word order in the comprehension and production of simple sentence in Japanese children. *Developmental Psychology*, 18, 62-76.
- Halliday, M. A. K. (1970) Language structure and language function. In Lyons, J. (Ed.) *New horizons in linguistics*. Penguin, Pp. 140-165. (田中春美監訳 現代の言語学 大修館書店)
- 秦野悦子 (1976) 助詞「は」「が」の獲得——自由再生課題を通して—— 日本教育心理学会第 18 回総会発表論文集, 162-163.
- 秦野悦子 (1979) 子どもにおける助詞「は」「が」の獲得の研究 教育心理学研究, 27, 160-168.
- 林部英雄 (1979) 文における既知情報と新情報の弁別に関する発達的研究 特殊教育研究施設報告 (東京学芸大学), No. 22.
- 林部英雄 (1980) 文における既知情報と新情報の弁別に関する発達的研究Ⅱ——インテンションの手掛りについて—— 特殊教育研究施設報告 (東京学芸大学), No. 30, 1-5.
- 林部英雄 (1983a) 文における新-旧情報の弁別に関する発達的研究 心理学研究, 54, 135-138.
- 林部英雄 (1983b) 日本語における語順の決定について——視点要因に関する実験的研究 特殊教育研究施設報告 (東京学芸大学).
- Hornby, P. A. (1971) Surface structure and its topic-comment distinction: A developmental study. *Child Development*, 42, 1975-1988.
- 石黒広昭 (1983) 能動文・受動文理解における語彙共感度の効果 日本心理学会第 47 回大会発表論文集, 541.
- 石黒広昭 (1985a) 日本語における授受動詞構文理解の発達的研究——格と視点 心理学研究, 56, 192-199.
- 石黒広昭 (1985b) テキストの組織化における視点の役割——産出者の視点からのテキスト世界の意味的総合—— 教育心理学研究, 33, 135-145.
- Ishiguro, H. (1985) Point of view in children's discourse. *Descriptive & Applied Linguistics* (ICU), 18, 97-108.
- 伊藤武彦 (1982) 日本語の「は」と「が」の動作主性——日本人、二言語併用者、アメリカ人日本語教師/学習者の比較—— 日本教育心理学会第 24 回総会発表論文集, 24-25.
- 岩井里江 (1982) 自閉的傾向児の言語の特徴についての一考察 東京学芸大学言語障害児教育課程卒業論文 (未公開).
- 影山太郎 (1974) 場所理論の見地から 言語の科学, 第 5 号, 39-84.
- Kemileff-Smith, A. (1979) *A functional approach to child language: A study of determiners and reference*. Cambridge University Press.
- Keenan, E. L. (1976) Toward a universal definition of "subject". In Li, C. N. (Ed.) *Subject and topic*. Academic Press, Pp. 305-333.
- Kitagawa, G. (1982) Topic construction in Japanese. *Lingua*, 57, 175-214.
- 近藤政 (1977) 助詞「が」と「は」の使い分けの発達 東京大学教育心理学科卒業論文 (未公開)

刊)。

久野 暉 (1973) 日本文法研究 大修館書店。

久野 暉 (1978) 談話の文法 大修館書店。

久野 暉 (1982) 談話の構造——日・英語 森岡健二・宮地 裕・寺村秀夫・川端善明編
講座日本語学 12 外国語との対照Ⅲ 明治書院, Pp. 120-154.

Li, C. N., & Thompson, S. A. (1976) Subject and topic: A new typology of language. In Li, C. N. (Ed.) *Subject and topic*. Academic Press, Pp. 457-489.

前田紀代子 (1977) 乳幼児の言語発達に関する調査研究 [IV] 日本教育心理学会第 19 回総会発表論文集, 362-363.

牧野成一 (1978) ことばと空間 東海大学出版会。

Miller, G. A. (1962) Some psychological studies of grammar. *American Psychologist*, 17, 748-762.

宮原和子・宮原英種 (1973) 幼児における文法発達の諸相 日本心理学会第 37 回大会発表論文集, 698-699.

宮原英種・宮原和子 (1976) Language development in a young Japanese child—mainly on the acquisition of particles— 福岡教育大学紀要 (教職科編), 26, Pp. 91-97.

宮地 裕 (1965) 「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について 国語学, 63, 21-33.

Miyazaki, M. (1979) The acquisition of the particles wa and ga in Japanese—a comparative study of L1 acquisition and L2 acquisition. (Unpublished).

森田良行 (1968) 「行く・来る」の用法 国語学, 69, 75-87.

村田勇三郎 (1982) 機能英文法 大修館書店。

野地潤也 (1976) 幼児期の言語生活の実態 文化評論出版。

大江三郎 (1975) 日英語の比較研究——主観性をめぐって 南雲堂。

大久保 愛 (1967) 幼児言語の発達 東京堂。

Pierce, S. J., & Bartolucci, G. (1977) A Syntactic investigation of verbal autistic, mentally retarded, and normal children. *Journal of Autism & Childhood Schizophrenia*, 7, 121-134.

Rees, N. (1978) Pragmatics of language. In Schiefellbusch, R. L. (Ed.) *Language intervention series*. Vol. 1: *Bases of language intervention*. University Park Press.

Robertson, S. S., & Suci, G. J. (1980) Event perception by children in early stages of language production. *Child Development*, 51, 89-96.

佐伯 胖 (1982) 学力と思考 第一法規出版。

Sano, K. (1977) An experimental study on the acquisition of Japanese simple sentences and cleft sentences. *Descriptive & Applied Linguistics (ICU)*, 10, 213-233.

Savin, H., & Perchonock, E. (1965) Grammatical structure and the immediate recall of English sentences. *Journal of Verbal Learning & Verbal Behavior*, 4, 348-353.

- Scollon, R. (1977) A real early stage: A unzipped condensation on child language. In Ochs, E., & Schieffelin, B. B. (Eds.) *Developmental pragmatics*. Academic Press, Pp. 215-227.
- Searle, J. R. (1975) Indirect speech act. In Cole, P., & Morgan, J. (Eds.) *Syntax and semantics*. Vol. 3: *Speech acts*. Seminar Press.
- Segalowitz, N. S. (1982) The perception of semantic relations in pictures. *Memory & Cognition*, 10, 381-388.
- Simmons, J., & Baltaxe, C. (1975) Language patterns of adolescent autistics. *Journal of Autism & Childhood Schizophrenia*, 5, 333-351.
- Slobin, D. I. (1982) Universal and particular in the acquisition of language. In Wanner, E., & Gleitman, L. R. (Eds.) *Language acquisition: The state of the art*. Cambridge University Press, Pp. 128-170.
- 田原俊司・伊藤武彦 (1985) 助詞ハとガの談話機能の発達 心理学研究, 56, 208-214.
- 田中 望 (1981) 「コソア」をめぐる諸問題 国立国語研究所編 日本語の指示詞 大蔵省印刷局, Pp. 1-50.
- Turner, E. A., & Rommetveit, R. (1968) Focus of attention in recall of active sentences. *Journal of Verbal Learning & Verbal Behavior*, 7, 543-548.
- 上野田鶴子・林部英雄・山田 洋 (1979) 往来動詞文の理解の発達に関する実験的研究 音声研究会資料, Pp. 533-539.
- Uyeno, T., Harada, S. I., Hayashibe, H., & Yamada, H. (1978) Comprehension of sentences with giving and receiving verbs in Japanese children. *Annual Bulletin of RILP* (University of Tokyo), 12, 167-185.
- Wing, L. (1975) *Early childhood autism*. Pergamon Press. (久保紘章・井上哲雄監訳 1977 早期小児自閉症 星和書店)
- 吉本 哲 (1982) 「は」と「が」——それぞれの機能するレベルの違いに注目して—— 言語研究, 81, 1-17.

—受付 1983. 12. 12—